

よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 137



人間は「いま」しか生きられない。昨日のことを考えている「いま」を生き、明日のことを考えている「いま」を生きている。「昨日」のことをクヨクヨと考えているのも「いま」なら、「明日」を楽しみにしているのも「いま」である。しかし、厳密に見ると、人間は「いま」を生きることができない。「いまだ！」と想っていても、その「いま」はアツという間に過ぎてしまい、すぐに「過去」に飲み込まれてしまうからだ。そうなると人間は、「過去」にしか生きられない生き物なのかも知れない。そんなことはないよ、明日の予定や、未来について考えることもできるじゃないかと言われそうだ。でも、それすら、「過去」のデータや、「過去こうだった」という情報を、「未来」に投影しているだけだから、やはり「過去」なのだ。そうなると、人間には「未来」はないのだろうか。そんなことはないはずだ。ただ「未来」は、「人間に知らされない」という形で立ち現れる。なぜなら、人間の「未来」は、「悲観」か「楽観」かのどちらかに偏ってしまうからだ。そんな偏った「未来」は幻想だと打ち破ってくれるのが「阿弥陀さん」だ。人間の予想をすべて裏切つて、純粹な「いま」を与え続けようとするはたらきだけが、私を救うのだ。

仏壇のお花の向きが 間違ってるって!?

武田 釋定光（住職）
しやくじやうこう

■お花の向きが変! ■

何も疑問に感じることもなく、ごく当たり前のように仏壇の前でお勤めしていたのです。ところがある日、「お花の向きが間違ってるんじゃないか」と思ったのです。お花の綺麗な方を人間に向けて供えてるじゃないかと。「別に、人間の方に向けて、何か問題でもあるのですか」と疑問を持たれる方もいらつしやるかも知れませんか。

しかし、よく見て下さい。仏壇は、仏さん、特に中央に安置されている御本尊ごほんぞんの阿弥陀さんをお祀りまつするためのものでしょう。もし仏さんを祀るのであれば、お花の綺麗な方を、仏さんの方に向けて供えなければいけないのではないですか。それなのに、お花の裏側と言いましようか、汚い方を仏さんに向けて供えています。こうなると、仏さんは、いつもお花の汚い方を見つめていることになりませんか。汚い方を仏さんに、そして綺麗な方を人間に向けて供えるのは、仏さんを冒瀆ぼうとくしているではありませんか。そう思ったら、お花の向きが変だ! と思えたのです。

■お花の「正しい」供え方

しかし、供え方が間違っているから、明日からは、仏さんの方に綺麗な方を向け、人間の方に汚い方を向けて供えよう、という話ではありません。また、どの方向からも美しく見えるように供える華道の流派があるようですが、その流派のように供えましょうという話でもありません。

やはり、人間の方に綺麗な方を向けて供えるのが、「正しい供え方」だと言われます。なぜ、それが「正しい供え方」なのかと尋ねますと、このお花は、仏さんのためだけに供えるものではなく、人間、つまり「自分のため」にも供えるものだからだそうです。やはり、人間の方に綺麗な方を向けて供えるのが「正しい供え方」なのです。

因速寺の本堂の「お莊嚴しやうげん」も、人間の方に綺麗な方を向けて供えています。また、お花が供えられている宗教施設であれば、どの施設でも、お花は人間の方に綺麗な方を向けて供えられているのではないでしょうか。

そもそも、仏壇のお飾りも、また本堂のお飾りも、共に「莊嚴しやうげん」と呼ばれます。「莊嚴」とは、眼では見ることのできない仏さまを、譬喩ひよ的に、眼に見える形で表したものです。それを「方便ほうべん」とも言います。「方便」とは、真実より格が落ちるとか、「偽物」という意味ではありません。人間には、決して眼で見ることのできない仏さまを、何とか眼に見える形にして伝えたいと願われた、祖師方の、血の滲むような努力の結晶なのです。ですから、「莊嚴」は、単なる「飾り」ではありません。そこには祖師方の「願い」が込められているのです。

■なぜ仏像は「人間の形」をしてるの？

因速寺には、阿弥陀如来の立像りゅうざうが、本堂の中央に安置されており、この仏像は、中世の仏師・快慶かいけいさんの工房で造られたものらしいです。

そもそも仏像をなぜ「人間の形」に彫り上げるのでしょうか。

決して眼には見えないはずの〈真実〉を、なぜ「人間の形」に彫るのか、不思議ではありませんか。インドで興おこった初期の仏教では、釈迦しやかの滅後めつご、仏陀を「人間の形」としては残しませんでした。

「法輪ほうりん」や「菩提樹ぼだいじゆ」や「仏足跡ぶつそくせき」で表現しています。しかし、

紀元一世紀頃にガンダーラとマトウラーで、ヘレニズムとイラン文化の影響で「人間の形」として仏像が誕生したようです。つまり、仏像にはギリシャ彫刻の技法が織り込まれているのです。

阿弥陀仏像も、その後に彫られ、時代を超え、地域を超えて、日本にまで伝えられました。

■「仏像」も「お花」も仏さま

話を元に戻しますと、「仏像」は、人間の眼には見えない〈真実〉を伝えたいという願いから造られました。その願いを「人間の形」に彫れば「仏像」が生まれ、また「お花」を供えれば、それが形を変えた仏さまです。つまり、「お花」は仏さまの世界をあなたに伝えて下さる「生きた教材」なのです。本堂のお花を「仏花ぶつか」と呼ぶのは、そういう意味があるのでしょうか。

いまは、本堂に、白い菊と黄色い菊が数本供えられています。菊の花は、花屋さんで売っています。ですから、枯れてしまえば、また買えばよいのです。しかし、その菊は、本堂で枯れた菊ではありません。別の菊でしょう。つまり、私たちには、同じ菊のよ

うに見えますが、〈真実〉の眼で見れば、同じ菊は、この世に一つもないのです。すべてが「代替え不能」のいのちを生きているのです。それは菊の花だけのことではありません。その菊を見ている私自身が「代替え不能」のいのちを生きているではありませんか。このように菊を見たとき、菊は、私自身のいのちのあり方を教えて下さる「仏さま」に変わります。こういう「教え」を受けるために、「お花」は人間の方に綺麗な方に向けて供えるのです。

■目にするすべてのものが阿弥陀さんの「教材」

仏壇の「莊嚴」が、すべて私と「対面」するように供えられているのは、このためだったのです。それで、仏壇にお参りする度に、「さて、お前は、何のために私を拝んでいるのか」、「何を拝んでいるのか」と、絶えず問われてくるのですね。

こういう眼を開くと、仏壇の「莊嚴」だけが「莊嚴」ではないことに気がきます。公園に生えている木々も、空を飛ぶ鳥たちも、そして、太陽や月や星も、すべてが「莊嚴」だったのです。

なぜならこの世のすべての出来事や実物は、阿弥陀さんから生まれてきたからです。私を生んだ母、母を生んだ母みなもといのちを遡さかのぼれば、何億年にまで遡れます。その源は、阿弥陀さんです。私は、阿弥陀さんによって、この世に生み出され、阿弥陀さんの設しつらえて下さった「学校」に誕生したのです。この世のあらゆる物事は、すべて阿弥陀さんから生まれてきたのですから、「この世は〈私一人わたしひとり〉を教育する阿弥陀さんの学校」なのです。卒業するまで、私たちは阿弥陀さんの教育を受け続ける生徒になるのです。この世には〈私一人〉しか「生きていない」のですから。

父の死から

芹澤 真幸（千葉県我孫子市）

二〇二三年三月二十二日に父が急逝してから、およそ一年が過ぎた。

何らかの病気であることが発覚してからほんの数日で亡くなってしまった。あまりに突然のことだったため、振り返ってみると、私たち家族はさしたる実感もないまま、押し寄せてくる日々に流されることになった。

とりわけ死後の手続きの煩雑さには驚かされた。主に私と母とが共同あるいは分担で進めていったのだが、年金等の手仕舞いに始まり、金融機関の解約手続き、家族が暮らしている自宅の登記変更など、済ませておかねければならないことはいくつもあり、書類集めの煩雑さに加えて、それらのうちのいくつかには微妙な期間で期限が切られているのだった。にもかかわらず、このご時世からそれらの手続きを行うためには事前には予約が必要なことも多く、もともとが悠長な性質の私たちが「そろそろあれもやらなきやね」などと億劫がりながら電話予約を試みると、数週間先まで枠に空きがないなどということが一度ならずあった。そのたびに懲りない私たちはカレンダーを見つめて詮無い愚痴をこぼすのだった。

そうこうしながら、人が死ぬということの行政的な意味を思い知らされた半年余りであった。

喪失の実感がないーと最初に書いた。母や姉の内心はわからないが、私自身のことでは言え、それは約一年が経とうとしている現在でも、ほとんど変わりはない。何よりもあまり悲しくないいや、正しくは悲しみを感じられない、なのかもしれない。もちろん四十代も半ばに至った人間が、親の死に悲嘆に暮れて泣き暮らすなどということは、滅多にないことかもしれないし、自分でもまずそうはならないだろうと思う。ただそれを踏まえたとしても、悲しみを感ずる瞬間がなさすぎるように思える。そのことに少し戸惑っている。

この歳まで実家から離れたことがなく、しかも根が引きこもり気質の私は、これまでの四十数年を両親の顔を見ながら暮らしてきた。評論家として家で仕事をしていることがほとんどだっただけでなく、何より生活する者としてのあり方を大切にしていた父との距離は、少なくとも実家から独立して生活している同年代の人たちよりは近かったのではないかと思う。もっともそれはあくまでも物理的な距離の近さであって、精神的なそれではなかったのかもしれない、この頃は強く思うのだけれど。

亡くなる数年前から意識的に、父が風呂から上がって床に着くまでの三十分ほどを勝手に二人で会話するための時間とし、私がその時に考えていることを聞いてもらったり、逆に彼が得意とする諸分野の知見についてのさまざまな疑問を投げかけたりなどしていた。すでに高齢の父と話せる時間ももうそれほどたくさんは

残されていないとなれば、早いうちになるべく多くの言葉を交わしておきたいと思ったからだ。父はいつも面倒がる様子もなく私の話に付き合ってくれた。

就寝直前のわずかな時間のことであり、それほど踏み込んだ話ができただけではなかったのだが、それにもかかわらずしばしば垣間見えていたのは、父が自らの思索を深めるために重ねてきた努力の膨大さだった。もちろん読書量は尋常でなく、その分さまざまな分野に広く通じているというのがあるのだが、それよりもむしろ一つ一つについてしっかりとした視点を持って理解していること、さらにその視点の深さと独創性が、六十年にわたって文字通り弛まず継続された研鑽^{けんさん}によって築き上げられたものであると感じさせられた。それを直接に聞くことは楽しかったし、ましてそういう相手に自分の考えを聞いてもらえることは嬉しいことだった。

私たちはそうやって夜更けの短い時間を過ごしていた。あるいは、私の方が一方的かつ暢気^{のんき}に息子であることの特権を行使していたのだと言ってもいい。ただ正直なところを打ち明ければ、父の生前にはまだ、父がその人生で積み重ねてきた知的研鑽^{けんさん}のほんとうの大きさを理解できてはいなかった。一言にすれば、侮^{あなど}っていたのだ。そしてその侮^{あなど}りは、たぶん私のそれまでの努力の少なさと、精神的な自立性の低さから来ていた。だからこそ、距離の近さは単に物理的なものでしかなかったのではないかと今は思うのだ。

そうした時間は、一家揃って新型コロナウイルスに感染し闘病

した二〇二二年の夏以降には、ことさら大切な時間になっていった。

家族の中では最も高齢であった父が、最も重い症状に苦しんだ。四十度の熱が十日以上も続いた。さらにか解熱した後も、食欲不振が長いこと続いた。

それを機に父は目に見えて衰えてしまった。父の長年の友人だった人は、病後に会った際、その変わりように衝撃を受けたと話していた。もともと、日頃あれほど芯の強い人が薄らとでも自らの死を意識するほどの闘病だったのだ、ダメージが残ってしまうのは仕方ないことだったのだろう。私たち家族は、どうにか今回を乗り越えてくれたのだからこの先しばらくは大丈夫だろうという気持ちで、その衝撃を掻き消していたように思う。

母ともよく話すのだが、亡くなった後で振り返ってみると、どうにか生活に復帰してからの半年ほどは、彼に与えられたギフトのような時間だったのかもしれないとさえ思う。その半年ほどの間に、準備してきた自作の詩劇を上演にこぎつけたことと、その第二作目を書き上げたことは、人生の最後に成し遂げた特別なことであったのかもしれない。それ以外は、それまでと変わらず真摯に生活と向き合いながら、ひたすら研鑽^{けんさん}し続ける日々だった。

そしてこのような時間を過ごす中で、母は微^{かす}かに遠からず訪れるであろう別離を予感し、それに対する覚悟を固めていたという。私も日常的にその衰えた姿を目にすることで、無意識にそうした覚悟を作っていたのかもしれない。悲しみが感じられないのは、悲しみが深すぎて受け止めきれないからだなどとよく言われ

る。けれども反対に、至近^{しきん}にいて過ごした時間が長かった分、いわゆる「心の準備」ができていたのかもしれない。どちらが正解かは、もう少し時間が経ってみないとわからない。

もちろんふとした瞬間に、得も言われぬ虚無感というか、どこかやりどころのないような感情に襲われることはある。もしかするとこれが寂しさなのかもしれないが、涙がこぼれたり物事が手につかなくなるといったことは、今までのところはやはりない。深く考えずに、以前とさして変わらない日々を暮らしている。

(了)

■真幸^{まゆき}さんの文章を読むと、芹澤俊介氏が立ち現れてくる。ひとは一人ではなく、そのひとと関係のあった数だけ存在するという。だから、当然、「真幸さんと関係のあった俊介氏」と「私と関係のあった俊介氏」は別人である。真幸さんにとっては、「父」という関係の俊介氏がいた。しかし、「父と子」という関係であっても、それが上下関係ではなく、並列関係にあったのだと文章を読みながら思われた。並列関係とは、「死」を前にしたときに現れる、ヨコ並びの単独者同士という関係だ。単独者同士が、机を前に向かい合っている。そんな情景が私の中に浮かび上がってきた。しかし、どこまで俊介氏を想おうと、それは「私の中」に出来上がった俊介氏像^{いざな}という域を出ない。たとえ「息子」という関係にあった真幸さんであっても、それは変わりはない。だから、俊介氏をどう思い描こうと、それは所詮、「自分が受け取った限りの俊介氏」なのだ。私たちの知っている俊介氏は、俊介氏のごく一部分でしかなく、〈真実〉の俊介氏ではない。貪欲^{どんよく}が悲嘆を生む。その貪欲の手を切り落とすものが〈真実〉である。 住職

門徒の憶いと役割^{おも}

森 孝司(山形県新庄市)

はじめに、この度の能登半島地震により、被害に遭われた被災者の方々に、心よりお見舞い申し上げます。

◆ 東日本大震災での苦い思い出 ◆

私は、2011年の東日本大震災では忘れられない苦い思い出があります。震災直後の3月下旬、石巻市内^{いしのまきし}の避難所へ炊出しに参加する機会がありました。炊出しは職場の災害支援で日帰りの活動でしたが、私はすっかり「善人のボランティア」という気持ちになっていました。温かい豚汁とおにぎりは、被災者に大好評で感謝の言葉もいただき、予定した活動を無事に終えたにもかかわらず、帰りの車内は会話の無い、重い空気が流れ、満足感とは真逆の虚無感でいっぱいでした。

この時の虚無感^{むなみ}は心の奥で、ずっとくすぶっていました。ある法座で親鸞聖人は、流罪^{るざい}先の越後で底辺で生きられた人たちと「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」、「われら」として生きられたことを学びました。その時、私には「親鸞聖人だったら被災者に「われら」と一人称で寄り添っていただろう。しかし、お前は上辺だけだ!」と聞こえてきました。そして思い知らされたのは、最初から寄り添う気持ちなどなく、私は、「あ

なた」「彼ら」と言って安全なところに身を置いていたのです。しかも、そんな自分を誤魔化す生き方をしてきたように思います。思い返すと、被災者はこの先も過酷な避難所生活が続き、生活再建の不安も抱えていました。一方の私は、その日の炊出し活動を終えれば温かい風呂のあるわが家に帰れる身、根本的に違う立ち位置から、「私が」「被災者に」「してあげた」という慢心でしかありませんでした。

◆『月刊同朋』&『同朋新聞』を読んで交流しましょう！◆

いつもの『よびごえ』から少し趣向を変えて、宗門の雑誌を話題にさせていただきます。皆さんは、『月刊同朋』という雑誌をご存じでしょうか。「仏教がみちびく、あらたな人生」をコンセプトにして、混沌とする現代社会を生きる私たちに「真・宗（ほんとう）」の人生へと導く、家族がみんなで読める素晴らしい雑誌です。

購読部数は、宗門の規模からして3万部以上はあるだろうと思っていました。残念ながら宗門の寺院数（約8600カ寺）の半分にも満たない3700部（2022年6月号）と知り、情けない&勿体ないという気持ちでいっぱいになりました。そして、私の関心は一層強まり、厚顔無恥と思われるでしょうが、出版部のみなさんと意見交換をさせていただきました。

お陰で同誌に対する職員の熱い想いを感じました。しかし、肝心の購読部数は、2022年までの6年間で36.5%減少という非常に厳しい状況です。要因としては、教団特有の営業力の低

さ、売り込みの弱さだと思っています。購読者拡大に向け全宗門的な取り組みが必要です。つきましては、全国の『よびごえ』愛読者の皆様にこの誌面をお借りして、『月刊同朋』の購読拡大へのご協力をお願いします。（購読申込先は、東本願寺出版『同朋』係まで。TEL 075-371-9189。FAX 075-371-9211。年間購読料は四二〇〇円です）

次は、『同朋新聞』（2023年7月号）の「読者のお便り」への投稿記事に感動し、そして共感したお話です。「大切に守り維持するお寺」という題名で、投稿者は滋賀県の76歳、匿名の男性でした。

「住職が不在になつて40年ほど経つが、門徒が協力して月に2回は御仏供（仏飯のこと）をあげ、お盆と報恩講の前には仏具磨き、お寺の掃除を年に何度も行い、法事や報恩講を勤めている。お寺を維持することは皆の協力が必要です。お寺のために自分たちができることを一生懸命して、皆でなんとか盛り上げていこうという気持ちを大切にしてきました。この思いを次の世代にも受け継いでもらえることを願っています。」という投稿でした。

滋賀県は長浜教区だろうか？滋賀県あたりは小さな寺が多いから、住職も不在で、うちの寺（無量寺）と同じだなと思いました。月に2回とはいえ御仏供もお備えしているのか！凄いな。投稿者の方は、宗門の同じような境遇の門徒に呼び掛けて下さったのかなと思いました。

秋の彼岸会で、この記事を紹介させていただいたところ、「俺だも、もつとがんばらんなねな！」という声がありました。

手次寺が無住になったところ、県内の同じようなお寺さんを訪ね

たことがあります。護持活動や護持費の苦勞、将来の不安など展望のない話ばかりでしたが、帰り際には「今日は良かったねえ」、「また、頑張りましょうね」と言えました。

今の宗門には、門徒の声を届ける場、同朋の声に共感する場がありません。寺院活動や同朋会活動の発表と評価の場など、住職と門徒のモチベーションアップに向けた誌面づくりが必要です。

また、宗門の教化施策^{きょうか}では、共通の悩みを抱える寺院が、それぞれ工夫した情報の交換の場が必要です。そして、何より護持活動の愚痴を吐き出す機会を提供し、住職や門徒の「明日の一步」を支援すべきです。

最後に、「同朋新聞」と『月刊同朋』の私のお気に入りコーナーを紹介いたします。「同朋新聞」では、紙面の最後の方にある「読者の声」「読者のおたより」という小さなコーナーです（『月刊同朋』は「同朋のひろば」）。3ヶ月前の新聞への感想が投稿されていて、気になる文章を見つけると、古い新聞をもう一度読み返し、投稿者と座談したような気持ちになれるのです。また、同じページの「編集室だより」は、イベントや取材時の随想的なものですが、編集者の人間的な魅力を感じることが出来ます。

この新聞は、毎月70万部刊行されているそうですが、開封もされず玄関先に積まれている寺院もあるとのこと。そのような話を聞くと、出版部の職員へ「あそこは私も感動しました！」などと、年に何回か「読んでいます！コール」をするのが門徒の務めかな?！と思い、昨年の5月号から「同朋新聞」と『月刊同朋』へ感想を添え、クロスワードパズルの応募（スマホでも可能）を

始めました。そして、門徒と本山の関係性が希薄化する今、「出版物への感想を手掛かりにキャッチボールで宗門を元気に出来ないかなあ」と思っています。

多くのお寺で、新聞を配るのが容易では無くなってきています。「同朋新聞」は、東本願寺のホームページでも読むことが出来るようになりましたが、お寺に新聞を貰いに行つて、近所の門徒さんへお配りするのも同朋会運動だと思います。今月号からは非「読んでいます！コール」をお送りください！

■今回は、私が御縁を深くしている山形県の森さんにご執筆いただいた。文章からも伝わるように、「熱い真宗門徒」だ。最初のボランティアの話だが、凡夫^{ぼんぶ}は「善人のボランティア」以外には成れない。凡夫は、「してあげた」「喜んでくれた」「自分は一人称で寄り添えなかった」などとさまざまなことを考えてしまう生き物だ。でも、それは「自分で思った」のではなく、「阿弥陀さんに思わせてもらった」のだ。そう受け取れば、「愚痴」が「尊い教え」に転じる。凡夫は「阿弥陀さん」という愚痴の捨て場を持っている生き物だ。◆それから、教団の広報誌『月刊同朋』だが、確かに、恥ずかしくなるほどの購読数だ。これは「真宗門徒」が「消費者」になってしまったことを表しているのかもしれない。「教団を支える」という門徒意識が希薄になったのだろう。それはひとえに「教学」の貧困から来ている。つまり、「なぜ真宗教団が必要なのか」が明確になっていないということだ。教学は、「死に向かつて生きている」と考える絶望的な人間を、その「絶望感」から救い出すためのものだ。そうなれば、全人類が、「救い」のターゲットとなって出現する。

住職

★因速寺 掲示板★

永代経法要

— 人間を考える集い —
兼、命日の集い

門徒・檀家で有
る無し不問です

5月26日(日)午後1時～(受付午後12時30分)

冥加志お一人三千元

勤行＋法話＋落語

永代経とは永代に渡って私にまでお念仏を伝えて下さった先祖を偲び、また私から永代に渡って伝わっていくお念仏の教えを想う集いです。今年も法話の後の余興として、落語があります。どなたさまもお気軽にご参加ください。

◆写経の会◆

門徒・檀家で有
る無し不問です

(お勤め＋座談含む)

毎月1回 午後1時30分～4時頃まで

開催日…3月6日(水) 4月10日(水)

5月8日(水) 6月12日(水)

教材…正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経(上下巻)

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)をします。

お菓子とお茶を飲みながら車座になり座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。非日常を味わってみませんか？
どなたでも参加可能です。

冥加志…初回は三千元(教材費込)

二回目以降五百円



◇フッディ・サロン◇

〔輪読会〕

門徒・檀家で有
る無し不問です

一冊の本をみんなで輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、

語りつ会です。参加される皆さんは職種も様々、住所も様々、
なにも強制されることはありません。様々な本を通してそこ
に流れているへほんとうくに触れるのが会の趣旨です。
どうぞご参加下さい。どなたでも参加可能です。

開催日…3月31日(日) 4月21日

5月はお休み 6月23日 午後4時～

冥加料…お一人千円

※遅刻・早退自由です♪



◇ご命日の集い◇

門徒・檀家で有
る無し不問です

毎月のご命日のかたを縁として仏法を聴聞する集いです。

やがて私自身も、この世を去っていきます。

みすみす死ぬのになぜ生きるのか？

人間の根源的な問いに、あなたならどう答えますか？

開催日…4月21日(日) 午後2時～

5月26日(日) 兼永代経 午後1時～

内容…読経(焼香)＋法話(住職)

冥加志…冥加志は各会で異なりますので詳細は後日



武田定光
 の
 デッサンV
 真実

★1★ この世に生れたくて生れたひとは、果たしているのだろうか。おそらく、そんなひとは、一人もいないではないだろうか。気付けば、自分は、たまたま「人間」という生きものとして、この世に生れていたということではないか。この「気付けば」ということが、私が「この世」と関わる関わり方の接点である。中略 この「原因」を知りたいという欲求が、「神は自分のために人を創造された」（『聖書』創世記）という表現を生んだのだろうか。自分がこの世に生れた「原因」が偶然であるはずがない、何か大切な意味があるはずだという欲求に答えるものが、いわゆる「宗教」という文化現象だろう。しかし、それが「宗教」だとするならば、△真・宗△はそれとはまったく反対の志向性を持っている。その「原因」を、完全に「阿弥陀」なるものに譲託する。私の言い方だと「阿弥陀」は「△無・意味△」という意味なので、この「△無・意味△」なるものに「原因」を譲託することこそが△真・宗△だと思っている。

– 10 –